九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[008] 九大國文學會誌 : 8

https://doi.org/10.15017/15464

出版情報：九大国文学会誌. 8, pp.1-33, 1935-02-20. 九州帝國大學國文學會
バージョン：
権利関係：

九大國文學會誌

第八號

昭和十年二月發行

石山の石から……春日政治…(一)
新春漫語……小島吉雄…(四)
本居宣長に於ける和歌史の成立……笹月清美…(七)
「日本文學書誌」散見……平井秀文…(一一)
昭和十年一月十五日
提出卒業論文要旨項目……(一五)
研究室だより……(二一)
○會報……(二六)
○編輯後記……(三三)

九大國文學會

石山の石から

春日政治

これは昨年十一月二十日本會の例會に、私の訪書旅行の報告として、「辭書に見えぬ語一二」といふ題の下に話したことであつて、聞いた人には珍しくもないが、私は覺書として文字にしておきたいから書くことにする。話は近江國石山寺の藏經から得た語彙の二三についてゞある。

私は先年「古訓漫談」文學研究第二輯に於て、ヤウヤク（漸）といふ語の成立について述べたことがある。その時古事記傳の説を否定した上、この語がヤヤヤヤから來たか、又は單にヤヤから來たかについて疑を存して、最後にかう言つておいた。

ヤヤにクが附いて、上のヤがヤウカ（八日）のやうに延びたと考へるのも一説であらう。

しかし、其の際も記したやうに、白氏文集天永點にヤヤヤヤクニ（漸）と訓じたのがあり、昭和八年の秋石山寺で見た金光明最勝王經點（平安中期以後の加點）にヤウヤウクニ（暫）といふ例も見えるから、實は甚だ迷つたのである。然るに今度（昭和九年十一月）の石山行が圖らずこの解決をつけてくれたのである。それは大智度論天安點に

見ノ時ニ世尊、安徐ク此ノ病比丘ヲ扶ケテ、起シテ將テ……。（巻八）

と安徐にヤヽクと明かに假名づけしてあるのを発見したことである。ヤヤヤヤクニヤヤウヤウクニは更に後の作の語であるらしい。この經から前年には、ソダタク（到）といふ訓を掘出して喜んだが、今度思ひがけずヤヤクを採集して此の上なく嬉しかった。

之も先年「成實論天長點續貂」（國語國文昭和八年一月号）に於て

貢ヘル貢リノ日ニ息ユルが如ク……。（巻十一）

といふ文に於て、利息の殖えることをモユルといふ古語が珍しいと記しておいた。然るに今度石山寺の法華經玄賛點（淳祐の點ずる所とされ、天暦期のもの）を見るに及んで、

切韻ニハ估ハ市ニ税ス也。（巻六）

とあるのを見出した。古へは税を課することをモヤスと言ったのであって、まさしくモユ（息）に對應する他動詞である。萌字のモユ・モヤスの轉義であらうけれども、辞書には見えない語である。尚地藏十輪經元慶點には

坏器を陶シ、石田ヲ沃シ……。（巻一）

といふ語があって、土地を肥沃にする義にもモヤスを用ゐてある。意義は皆共通點を

もつてゐるのである。

モユ・モヤスと聯想されるのはラユ・ラヤスといふ語である。ラユといふ自動詞は古事記に見えて、神武天皇の熊野に出で給うた時、怪しい大熊の出て来て皇軍を惱ましたことがあつた。その條に

爾に神倭伊波礼毘古命、倏忽(ニハカ)ニ遠延(ラエマ)為シ、及(マタ)御軍皆遠延(ラエテ)而伏(コヤ)シキ。(中巻)

とあるので辞書にも掲げてある。しかし之に對する他動詞ラヤスは、仁徳紀、欽明紀の古訓にあるにも係らず、一般に忘れられて了つて、書紀の訓ラヤスをもラカスなどと誤り改めたものさへある。私は數年前に、西大寺本金光明最勝王経古點を調査した時、

所有ル毒藥　蠱(マシモノ)　魅(ルホスモノ)　厭(オソフモノ)　禱(ラヤスモノ)……。(巻七)

といふ所があつて、實はラヤスモノを珍しく感じたのであつたが、今度の採集旅行で前記の大智度論天安點から、

廻(カヘリ)り盻(ミ)テ巧ニ暗(ラヤ)ス。(巻十四)

といふ訓と、又法華経玄賛點から

狐の音ハ亀都反。玉篇妖(ラヤ)ス獸ゾ、鬼ノ所乘ナリ。(巻六)

といふ訓とを得た。怪獣などの蠱惑したり、美人の魅惑したりする義に普通に用ゐられたものであるから、辭書には入るべき古語である。

私の仕事の一部には、――自分の仕事を吹聽するのも可笑しいが――こんな種類のことが伴つてゐて、恰も古い岩石層を打碎いて、それから古生物の化石を捜すのに似たものである。隨分氣の長い話ではあるが、一度は誰かやらなければならない仕事であるし、貪乏籤の次手にこつ〳〵鎚を動かしてゐれば、何かの獲物はあらうし、又已に獲たものと新しく得るものとの相互関係が追ひ〳〵ついていきさうに考へられるのである。

（昭和十年一月二十日記）

新春漫語

小島吉雄

今年は赴任以來はじめて福岡の正月を経験した。暖い落着いたいゝ正月だと思つた。床に活けた白梅はもとり、庭前の梅も的皪たる花を着けた。しかし、わたくしには、まだ旅での正月といふ氣分の退かないのが残念である。

昭和九年は私にとつて、とても忙しい年であつた。學問的な仕事の上で言つても、

無暗矢鱈に材料あつめに奔走して少しも整理がついてゐない。慌しい氣持に追はれどほしでした。二三の雜誌に小文を発表したけれども、行文に推敲を欠くところがあつたり、調査が充分でなかつたりして、時には讀者に不審を起させたり、或は思ひ過つた記述をしたりした点も両三はあつたやうである。學者としては、恥づべきことだと自責してゐる。その一は、九大國文學會誌第七號に執筆した連歌書買名の條である。私の記述では石田元春氏所藏の「片端」には惣拵方行助の署名があるやうに聞えるのであるが、あれは私の書きあやまりである。石田氏所藏の「片端」には專順作とあるけれども、行助作とはない。行助の署名あるものは「國語國文」にも紹介しておいたやうに、連歌口傳抄といふ書物である。私が、あまりに自分の記憶を信じ過ぎて、充分調べずに筆を執つたため、あゝいふ過りが生じたのである。こゝに深く遺漏を詫びておく。今年は少し時間の餘裕をつくつて落着いて、纏のた仕事をしたい。

近頃讀んだもので心に残つてゐるのは、舊冬示の東京朝日學藝欄に出た勝本清一郎氏の「日本文學に於ける エロチシズム」といふ文章と新春早々福岡日日に載つた春日教授の「歳次雜想」とである。勝本氏の一文は「日本文學の根柢にある最も本質的な

ものは鋭敏な感覚である」といふことをテーマとした一文要時評に過ぎぬが、さういふ常識的な感想の中に私は色々な示唆を受けたのである。日本文學を感覚的所えから見ようとする此の人の考へ方は、確かに一見識でなければならぬ。

春日教授の「歳次聯想」は含蓄に富んだ名文章であつた。勝本氏から受けたものは智識的示唆だけに過ぎなかつたのであるが、「歳次聯想」は私の魂の洗禮であつた。實際春日教授の隨筆は此頃堂に入つて來た。雑談閑語の間に心の糧を説いて滋味盡きざるものがある。私は二日間にわたつて連載せられた「歳次聯想」を耽讀したことであつた。そして、深く自己を反省させられたことであつた。由來、學者には學者的人格といふものが大切である。社會的に多量の仕事を発表してゐる學者でも學者的人格に乏しい人がある。人格のない學問は、凡そ意味のないものである。春日教授の隨筆は、教授の人格の逆散である。

今日も馬鹿に暖かい。過日、法科の大澤教授に會つたら、同氏の住居の附近では此の日ごろ雲雀が囀つてゐるといふお話であつた。徒然草の作者ではないが、かやうな春らしい暖ある宵のすさびには、残しおかじとおもふ反古などを整理しながら、過ぎ

にし方を思ふのも、またあはれ深いものである。書棚の整理をはじめると、私がまだ馬出や榊木屋などに住んでゐた頃の書類の一束が出て来た。その中に、竹馬の友が私の九大赴任を祝して呉れた手紙がある。

「静かな狭い道を辿りてゆくが學者の道で、その小さいと平凡をあざ笑ふ日が来たらもう心が荒んでゐるので、わき目をせず、自分の静かな小さい天地に安住しつゝ純一に魂を躍らせつゝ一すぢに生きてゆく事だ」

これは、彼がその手紙の末節で私に與へた箴誡であつた。「静かな狭い道」といふ六字には特に圓点が附けられてゐる。この友ともこゝ数年絶交同様に過して来てゐる私である。本年こそは、よい生活をしたいと思ふ。

（昭和十年一月十五日夜）

本居宣長に於ける和歌史の成立

笹　月　清　美

本居宣長の學問の特質はその方法がベエク的意味に於てフィロローギッシュであつたといふ點にある。即ち、對象の時代性は極度に重要視されたが、その歴史的意味の把握は彼の學問の指向とはならなかつた。これは國學一般に通ずる現象で、然つて文藝に

就いての史的研究の樹立は明治以後の學問的努力に俟たなければならなかつた。

然しながら、宣長の和歌に関する論説を見て行くと、和歌史が、素朴な形ではあるが、既に彼に於て成立してゐたと言ふことが出来るやうである。先づ「うひ山ふみ」の、學問をするものは古風及び後世風何れの歌をも詠まねばならないと説いた所には、

後世風の歌の中にも、又いひしらずめでたくおもしろく、さらに古風にては、よみえがたき趣どもの有ることなり、すべてもろ〳〵の事の中には、古よりも後世のまされる事も、なきにあらざれば、ひたぶるに後世を悪しとすべきにもあらず

（増補全集九ノ四九八）

と言つてゐる。尤もこのやうな作風の差異の認識は彼以前の人々にもあつたが、彼ほど後世のものゝ後世のものとしての價値を認めた者はなかつたと言つてよい。

更に「あしわけをぶね」を見ると、「ひろく此道の興廢を論せば」と説き起し「まづは上古より今に至るまで、此の道の盛衰風體の変化あら〳〵右の如し」と結ぶ一節（増補全集十ノ一八三―一八八）に於て、記紀の歌から萬葉集を経て廿一代集及びその後に亘る和歌史の大略を敍述してゐる。

この敍述は「風體よし」「歌ざまよければ」などといふ概括的な作風の比較で、その

藝術内容の具體的な叙述ではない。然し、「時代の風」「人の風々」「集の風體」即ち、和歌の作風に関する彼自身の味得に本づくものであつた。そして

世の風と人の風と経緯をなして、うつりもてゆく也（増補会集十ノ（八四））

と言つてゐるのである。

宣長にとつて新古今集は、「此の道の至極せる処にて此上なし」のものであり、ここに到るまでの和歌史は発展の過程であつた。その原因は彼によれば「すぐれた歌人が出たからである。然るにその後の歴史はたゞ衰頽の一路で、その原因は天才の出ない事と師範家、古今傳授などの因襲の形成とにある。例へば、道遙院實隆公は世に歌道中興の祖といはれるが、公にしてなほ古今傳授に欺かれ、その歌も「すぐれたることはすぐれたれども、なほ末代の風にして、古のやさしき風とはかはれり」と言はねばならない。況や「凡道遙院以来の名人、其風一やうにしてすこしづつの風の善悪、歌のよしあしはあれども、格別のけぢめなく、まづは一風」である。

藝術史が作風の変遷の認識から発足するものである限り、このやうな宣長の叙述は既に彼に於て和歌史が成立してゐたことを示すものと言はねばならない。そしてこの成立は、歌集のフィロローギッシュな研究の結果として生れたものに違ひないが、然も實

際詠歌上の模範とすべき歌の探求、即ち價値批判的意識による對象の研究がこれを導いたのであることは「あしわけをぶね」などを見ることによって明かである。

次に宣長はこのやうな作風変遷の根據を何処に置いたであらうか。即ちこれを何によって説明しようとしたのであらうか。「あしわけをぶね」には次のやうに言ってゐる。

上古は上古の體、中古は中古の體、後世は後世の體、をの〳〵その時代〳〵の體をのづからかはりゆく。そのかはりゆくは何故ぞなれば、人の情態風俗のかはりゆくゆへなり。とかく歌は人の情さへかはりゆけば、それにつれてかはり変ずる。これいやといはれぬ天地自然の道理也（増補全集十ノ一ヒニ）

と。

又

人の情につるゝと云ふことは、万代不易の和歌の本然也としるべしとも云ふ。即ち、和歌の変化は人の情の変化に本づくもので、その間には必然的の関係があるのである。その関係を「うひ山ふみ」では、

古風は時代遠ければ、今の世の人、いかによくまなぶといへども、なほ今の世の人なれば、その心全く古人の情のごとくには、変化しがたければ、よみ出る歌、古風とおもへども、猶やゝもすれば、近き後世の意詞のまじりやすきものなり。

（増補全集 九ノ五〇〇）

とも云つてゐる。

然らば和歌の変遷の基礎である「人の情態風俗」又は「人の情」とは何であらう。思ふに「人の情態風俗」は「人の情」の具象的なあらはれで、結局「人の情」を示すものと解されてゐるやうである。「人の情」は情、本情などとも言はれてをり、宣長によれば「情は自然也、たゞ求るは詞也」或は「情もとめ得て、さてその情について詞をもとむる也」で、歌を生み出す観照的な心の作用、或はも少し廣く人間の情感を意味してゐる。そしてこのやうな「人の情」は「世とつれて」（増補全集十ノ一六六）変ずるものなのである。

宣長の和歌史に就てなした根本的な考察は極めて嘗試的なものであるが、ともかくもこれで一應の形をなしてゐると云ふことが出来よう。

（昭和十年一月二十四日）

類書のうちで、最も新しく世に出た此書を繙て、思ふことから少しく。

「日本文學書誌」散見

平井秀文

批評にわたるはおのづから別であるが、書物の解題は、その書に就いての智識が全くない又は深くない者を、對象として述べられることが多いのであらう。よく知つてゐる者には要がない。少くとも我々の見る國文學書類に関するものでは、たしかにさうに違ひなく考へられる。從つて正しく誌すを要するは明かで、あるをなしと述べ、なきをありと書くに至つては、禍の及ぶところいさゝかにはとゞまらぬ。書史と稱し解題と題し或いは集覽と言ひ書誌と呼ぶの類は少くない。前出の書の非を訂し缺を補ひ更に新しきを加へてこそ、茲に後出する類書の存在價値が認められる。前書の蒙を啓かず衆知の謬を踏襲し、畳に骨を換へ胎を奪ふの觀ある如きに至つては評するを惜しむ。稀覯本とか容易に披覽の便を得られぬものとかなどの類はとにかく、まだ絶版にもならぬ活字印本ぐらゐは、實物にあたつて目次などに眼を通してから、解題に載せて欲しい、たゞ書目を擧げるにしても、誤謬はかうしたことから起り易い。

論は短きにとゞめて、此書を敢見する。さて、緣遠き文學書の少からぬことゆゑ、深くは望めぬ。誤字などは勿論、その他のこともすべて省いて、各作品の末に擧げられた諸本の項に関する二三を、氣のついたまゝに。たゞし、見た部分は少しく今までに関係したことのあるもののうちであるから、極めてわづかであるが。

體裁の統一あるを類書に比しての一特色と例言せられるが。或時は所收を示すに古典全集とのみあり他には第何期本になど明示したり、時には全く缺く。例を擧げるまでもなかろう。叢書類所收本の記載は注意を要する。

一冊に數種が翻刻せられてゐるとき、そのうちの一部の書の項では何々集所收と示しながら、他の一部の書の項では全くそれに觸れてゐない。例へば雨吟集が古典全集歌謠集上に含まれてゐるを示しながら、同じ集にあるに梁塵祕抄の項では全く示されぬなど。これでは古典全集に翻刻なきことゝなる。單に古典全集だけではないが。看看は實物を觀てゐるだらうが。

古鈔本類の複製あるはなるべく知りたいが、その存在が缺けてゐる例もある。前田家本靈異記、文鏡祕府論、俊康頼自筆本寶物集などあるが。せめて叢書類所收の複製本は看過したくない。

空海関係書類に限ってか、古鈔本は顧られてゐない。これらこそ作者時代のものが存するのに。眼心抄の如き、自筆本かとさへ傳へられ、祕府論の示版本の存在も示されぬ。今だにその版行が行はれてゐるが。他の例と比して統一せられてゐぬ一例であらう。

活字印本になってゐる書で、その明示がないものもあるらしい。嘉祿本古語拾遺など。三寶繪詞の印本もあるが、此書誌の成稿後か。

版本の種類を悉く擧げるは困難であるが、代表させるものゝ選擇に妥當を缺くものもありはしなりか。新撰萬葉集の如き、契沖校本系統の一本ぐらゐは擧げるべきである。校註ある本としてじも、又、寛文版本にない下卷の序文が、契沖本で初めて加へられたことからしても。

あるをなしとする例が、遺憾ながらある。打聞集には保存會本の解説以外に研究書註釋書なしとあるが、研究論文もあつたし、立派な註釋書もある。參考宇治拾遺物語新釋に合綴せられてゐるのがそれで、著書が此書を知らぬならばとにかく宇治拾遺物語の項に明示してゐるのだから妙だ。この矛盾は恐らく見知らぬ書を擧げる罪で、見たとしても背文字ぐらゐで目次に及ばなかつたのか。初めて注する人の苦心に稍〻氣の毒である。

著者の成稿後に於けるものと認められる諸本のことは勿論右の擧例のうちにない。當然である。作品の收捨については言はぬが、目次を見てあまりいかゞと思はれたことは、法王帝説のないこと、史書だとならば六國史類を述べたと矛盾する。歌謠を含

んでゐるほどなのに。否、歌經標式のないのさへ不思議でなないか。

説くは狹きにとじめる。右の如き範圍に限らずに觀れば尚多からう。門外者流の筆すべきではない。書名の呼稱を假名で示したなどは從來の類書に見えぬところである。おもふにかゝる書をなすの難き、なした人にして初めてわかるものであらう。われらが書下しに云為するは畏るべきである。此書を成されたその大勇を羨むまへに、まづその力の大いなるを仰ぐ。

昭和十年一月十五日提出卒業論文要旨項目

香川景樹の歌　　古賀英雄

一、景樹の「調」論

二、景樹の「古今和歌集正義」を通して觀た彼の歌に於ける興趣

三、景樹の作品

（桂園一枝及び桂園一枝拾遺について）

隨筆文學論

中尾　信

一、隨筆文學の地位
二、隨筆文學の意義
三、隨筆文學の特質
四、隨筆文學としての枕草子

新撰萬葉集の研究

藤野邦雄

一、諸本
二、撰者と成立年代
三、和歌
四、和歌と漢詩との関係
五、和歌の用字法

樋口一葉の研究要旨

森　口　富　士　雄

國文學史を西洋文學史に比較して最も著しい特色と認められる事はその餘りに考證的詮索に墮して居ると言ふ事である。國文學史をしてかゝる傾向より免かれ能はざらしめたものは國語の特質と出版形式の特質とに基くと思ふ。たとへば、表記形式の複雜多樣であつた事や　和本製の毀損、散逸し安かつた事などは同じ作品に種々異系の物の生じた一原因である。然つて作品の考證的研究が國文學史の重要な役割を演ずるに至つた事は寧ろ當然の事と言ふべきであらう。

かゝる傾向は國文學の特質に基く必然的な現象で、是を非難するは當らざるの甚だしいものではあるが、しかし考證偏重の結果文學史本領とも言ふべき文學史潮変遷の史的研究をやゝもすれば等閑に附せんとする傾向の存するのは在來の國文學史の一缺陷ではなからうかと思ふ。殊に明治文學の研究に當つても尚かゝる缺點を踏襲せんとするが如きは吾等の最も遺憾とする所である。

曾て某誌に二葉亭研究資料として、その入學願書、退校願、履歴書等を掲げたるを見て、自分は一種の幻滅を感じた。江戸文學と明治文學との特色はその思想的背景の

日本的なると世界的なるとに存する。されば かゝる一小資料の價値たるや論ずる迄もあるまい。

然らば吾等は如何なる態度をもつて明治文學を研究すべきかと言ふ事が吾が論文中に取り扱つた最初の問題である。それに對する自己の抱負を述べ、その見地に立脚して一葉の作品と思想とを檢討した。更にその時代的影響及び生活環境の影響如何と言ふ問題にも論及し、最後に明治文學史上に於ける一葉の地位如何と言ふ問題にも觸れる所があつた。一葉とその時代との関係をより良く説明せんが爲に近松とその時代との関係を論じ、これら両時代の特色が両作家の作品の上に如何に表現されて居るかと言ふ事を彼等の創作した人物の性格の相違によつて説明した。

西鶴町人物の研究

山崎忠夫

目次

一、人としての西鶴　一頁
二、町人物概觀　二一
三、西鶴の經済觀　三七

四、町人物と俳諧　九九
五、藝術家としての特色　一二三
六、學殖　一三五
七、文章　一四五
八、描寫態度　一五三
九、西鶴年譜　一七一

菅原傳授手習鑑について

―近松から出雲へ―

山中摩耶子

(一)

内容

「出雲時代」の名によって代表せられてゐる時代は、あやつり劇史上における極盛期であったと共に、又一方今日にまでそのまゝの生命を舞台に保ってゐるとゐるといふ事において、淨瑠璃史上最も意義ぶかい時代であると思ふ。この意義深い時代がいかにして近松淨瑠璃から発展して行ったかといふ事即ち近松から出雲への淨瑠璃の展開はいかにして行はれたかといふ事をしらべ、出雲時代の中でも最も盛況を

呈した時代の一作品、菅原傳授手習鑑（延享三年八月二十一日竹本座で上演せられたもの）をとり出してその解剖を行ひ、あはせて出雲中心淨瑠璃の具体的價値擘明の一具とした。

（二）

全体の構造

第一、まへがき

1. 淨瑠璃の文學的研究について
2. 時代物と世話物について
3. 近松と近松後の淨瑠璃

第二、近松から出雲へ

1. 古淨瑠璃から近松へ
2. 近松から出雲へ
3. 菅原傳授手習鑑について

第三、むすび

1. 菅原傳授手習鑑の實質的價値と史的價値
2. 出雲淨瑠璃の歌舞伎化とその衰退

研究室だより

○　昨年の夏には、文部省主催國語漢文講習會が本學部に依托され、七月二十五日から十日間十番教室又は一番教室で施行された。

春日小島両先生が五日宛出講されたが、題目は次の通りであつた。

文字及び文體より觀たる國文學　　春日教授

中世日本文學思想と日本精神　　小島助教授

この講義は両方共印刷にして講習會員に配付したが、まだ残つてゐるから、希望の方には實費でお頒ちする。

この講習會に卒業生の数氏が参會されたので、その穴を埋へ、福岡市内外の卒業生をも誘つて一夕卒業生のみの會合を催した。七月二十九日暑い日であつたが午後四時頃から新三浦に集まり、西先生を中心に歓談盡くる所を知らなかつた。當夜の主たる話題は語氏の國語教育論であつた。参會者は次の通り。

春日先生、　小島先生、　長敬一郎氏、　新谷恒藏氏、　野崎親氏

松尾哲夫氏　北島義天氏　笹月清美氏　加藤卓一氏　林　教氏

青　敏夫氏　　平井秀文氏

○夏にはいりて研究旅行にお出かけになる両先生は、今年は講習會のためお出にならなかった。然し秋は例年の通りお出かけになった。春日先生は十月末から十一月半にかけて、奈良及び石山方面、小島先生は十月半から十一月初めにかけて、水戸東京、宇治山田方面であった。

○最近入架の寫本・刊本類

日本書籍考	刊一	林　道春	
てには網引綱	刊一（上下）	柳井　道敬	
俳諧天角波抄	刊六		
物類稱呼	刊一（五巻）	越谷　吾山	
中庸輯略師説	寫二		
中庸或問師説	寫三		
中庸師説	寫四		
孟子師説	寫一四		
開口新語	刊一	岡白駒	

渾沌草　寫四（上）　跡部良顕

肥前國風土記（青柳本轉寫）寫一

うつほ物語（鈴木朖書入本）刊三。

世中に（枕草子風隨筆）（慶長七年作）寫一

世継物語　刊一

宇治大納言物語　異本（内顯・雜々集）（神宮文庫本轉寫）寫一

たいしよくわん（奈良絵本）寫三

諸國ゐんくは物かたり　刊一

當世御伽曽我　刊五　八文字自笑

當世御伽曽我後篇　風流東鑑　刊五　八文字自笑

百姓袋　刊五　西川如見

女童寶記　刊五　高井伴寛

八咫架樂秀　寫一　（烏丸光栄口授　加藤信成謹記）

國歌八論　轉寫一　荷田在満

萬葉伊呂波寄　寫一

新古今和歌集　寫一
日本紀竟宴和歌　寫一
建保名所三百首抄　刊六　里村紹巴
古連集　寫一
梁塵愚案鈔　寫一　一條兼良
竹本播磨少掾口傳　寫一　順四軒聞書
心中重井筒　（八行本）　近松門左エ門
艶狩叙本地　（七行本）　仝
山崎與次兵衛壽の門松　（七行本）　仝
日本振袖始　（七行本）　仝
本朝三國志　（七行本）　仝
平家女護島　（七行本）　仝
宵庚申卯月花　（七行本）　仝
玄宗皇帝蓬萊鶴　（十二行本）　紀海音
北條時頼記　（七行本）　（西澤一鳳　並木宗助）

○卒業論文題目　昭和九年十月及び昭和十年一月提出

昭和九年十月

一、万葉集長歌の研究　白木喬
一、虚栗試論　山田猛
一、日本童話史　海老原美武

昭和十年一月

一、香川景樹の歌　古賀英雄
一、隨筆文學論　中尾信
一、國文學に現はれた日本人の現世觀　橋本智英
一、新撰萬葉集の研究　藤野邦雄
一、雨月物語　福田純夫
一、樋口一葉の研究　森口富士雄
一、西鶴町人物の研究　山崎忠夫
一、菅原傳授手習鑑について――近松から出雲へ――　山中摩耶子

○ 昭和十年度第二學期講義題目

春日教授　國文法概説
〃　演習「異本枕草子」　前學期より継続
〃　演習「紫式部日記」
小島助教授　連歌概説
〃　演習「芭蕉七部集」
〃　演習「紀海音淨瑠璃」（心中淚の玉井、椀久末松山）

會報

一、六月二十七日（水曜）
午後五時より第二學生寮會所に於て、研究発表會兼例會開催
春日、小島両先生を始め、先輩、在學生多数の出席を得、まづ九大國文學會誌七號の分配をなし、弔慰金は基本金之部より出すことを全員異議なく決議した。研究発

彰者及び題目は左の通りである。

抒情詩人としての藤村　　横江　元治

宇都保偽作説について　　笹淵　友一

一、九月二十日（木曜）

午後五時半より第二學生集會所に於て研究発表會開催

春日、小島両先生を始め、會する者二十名、左記の様に研究発表があり、午後八時半散會した。

川柳の起源について　　高石　康男

郷土文學考（俳人、去来）　　中尾　信

尚ほ當夜は大雨、風強く、丁度大阪地方暴風水害襲来の前夜であつた。

一、十月四日（木曜）

午後四時より、呉服町片倉ビル共進亭ホテルに於て、十月卒業生の送別會兼卒業論文発表會開催、春日、小島両先生を始め、會員多数の出席を得て、非常な盛會で

あつた。 林川敏夫君の開會の辞に次ぎ、 以下の如く、 熱烈なる発表あり、

萬葉集長歌の研究　　白木喬

虚栗試論　　山田孫

日本童話史　　海老原美武

六時論文発表を終へ、 會場にて記念撮影をなし、 小憩後、 送別宴に移る。 高石原男君、 送別の辞を述べ、 春日先生より温情懇切なる御言葉あり、 白木喬氏卒業生を代表して謝辞を述ぶ。 卒業生の健康発展を祈り、 祝盃を汲み、 名残りを惜しみつゝ

午後八時散會

一、 十一月二十日（火曜）

午後五時半より、 第二學生集會所に於て十一月例會開催

松村君の「蕪村」 と題する研究発表あり。 今回は研究発表者（名なる故、 春日・小島両先生に御話をして貰く。 小島先生の「古今連談集を中心として」 の連歌のお話、 春日先生の本誌に御掲載の様な「辞書に無い詞」 のお話があり、 次いで先生御所蔵の「眞淵の手紙」（弟子栗田土満に宛てたもの）を拝見し、誠に有意義な時間を過し十時閉

會した。

一、十二月十七日（月曜）

午後六時より第二學生集會所に於て昭和九年最後の研究発表會開催。

両先生を始め會員多数の出席を得て甚だ盛會であった。

研究発表者氏名題目左の如し。

平安朝文學の特殊性について。　山本　安廣

雨月物語研究――白峯の實話性について――　伊藤　靜

一、昭和十年二月三日（日曜）

午後一時より第二學生集會所に於て卒業論文発表會開催。

春日、小島両先生を始め、笹月、平井　延淵　井浦　藤井　延壽寺　青　山田、海老原の諸先輩及び學生十四名、近来に無い盛會であった。が山崎氏は御病気、古賀氏は御所用の為め出席無く、其の発表を拝聽する事が出来なかったのは遺憾であった。論文題目及び要旨は別項記載の如くであり発表ごとに両先生の御批評御感想が

あった。會の中間、法文學部玄関にて記念撮影をなし、山中氏の発表を最後に午後入時閉會した。尚ほ當日席上に於て會長より昭和十年度幹事として杉山大吉君、今井保司郎君を指名された。

一、二月九日（土曜）

福岡市中對馬小路、やま利にて午後六時半より新卒業生の送別會開催。

會する者、春日小島西先生をはじめ十九名、林川君開會及び送別の辞を述べ、卒業生に對し春日先生より御懇切な御辞あり、前幹事藤野氏卒業生を代表して答辞をのべ、直に宴にうつる。外はまだ早き春雨の音しめやかに、内は三味太鼓、レコードの三部合奏にぎやかに、珍芸、かくし芸続出し、一夕の歓をつくして散會したのは十時であった。

一、昭和九年四月より十年二月現在までの會員の御不幸、左の通りで、謹んで弔意を表し、會則により香奠を贈呈致しました。

松村次男君の　御尊父

林川敏雄君の　御尊父
北島義夫氏の　御尊父
副島典史氏の　御尊父
長敬一郎氏の　御尊父
白井田敏雄氏の御尊父

（以上、贈呈順）

なほ昭和九年四月より會員及び會員の一等親、配偶者の死亡に對する弔慰金は基本金中より贈る事に決しました。（決算表基本金之部参照）

決算報告（昭和十年二月現在）

基本金之部

項目	收入	項目	支出
前年度繰越金	八三円〇〇	弔慰金	一八円〇〇
終身會費（四人）	四〇円〇〇		
合計金	一二三円〇〇		

差引残金總額　一〇五円〇〇錢也

現金之部

項目	收入
前年度繰越金	二九円九三
特別會員	四円〇〇
會費 卒業生（終身會費八基本金之部ニ收ム）	一四円〇〇
在學生	四一円〇〇
訓育費	二四円〇〇
例會残餘金	四円九九
合計金	一一七円九二

項目	支出
第七号會誌印刷費	四一円〇〇
第八号會誌印刷費	一二円〇〇
訓育費	二四円〇〇
交通費	一円五三
通話料	、一八
郵税	四円二二
雜費	、九九
寫眞代（研究室用）	、九五
合計金	八四円八七

差引残金總額　三三円〇五

會員異動

——昭和十年二月現在——

白木（民名）喬	(9)	熊本縣文本渡高等女學校（昭和九年末新任）
畑茂	(6)	朝鮮京城府梨花女子專門學校（昭和九年末新任）
海龙原美武	(9)	福岡市濱田町、入江方

編輯後記

どうやら第八號を會員諸氏にお屆けする事が出來ました。最初の意氣込みだけは、物すごく八號も是非活版にと思ひましたが、經費の都合で、再び昨年通りのプリント版に逆行してしまひました。猪突猛進の春に對して誠に申譯がない次第です。

なほ、原稿は、春日、小島両先生及び研究室の方々にのみお願ひしました。これだけでも會誌発展の第一歩として、悪しからず御諒恕下さい。若し第八号への玉稿御準備の方が御座いましたら、第九號が六月中旬頃発行される筈ですからそれまでに振のてお寄せ下さいますれば幸甚に存じます。

両先生はじめ、會員諸氏の御援助により、無事任を果す事が出來ました。深く感謝致します。特に常任幹事廷月氏の御懇篤な御指導に對し、厚く御礼を申上げます。

失錯の点は御見逃しあつて、何卒新幹事の敏腕に御期待下さい。

昭和十年二月十五日 印刷
昭和十年二月二十日 發行（非賣品）

編輯兼　高石康男
發行人　林川敏雄

福岡市外箱崎町帝大前
印刷所　プリント社
發行所　九大國文學研究室